

## 紀州徳川家伝来の伝住吉如慶筆「源氏物語手鑑」(個人蔵)の構成と淡彩画の意義について

河田昌之 (大阪芸術大学)

物語絵を代表する源氏物語絵(源氏絵)は、江戸時代初期以降、源氏絵享受の広がりを受けて土佐派や狩野派など諸派の絵師により描かれてきた。なかでも伝統的なやまと絵の画技を継承する土佐派や住吉派は主要な画題とする。本発表で扱う「源氏物語手鑑」(個人蔵)は、絵師を同定できる落款、印章などはないが、土佐派に由来する定型場面のほか、新たに加えられた場面を持ち、安定した構図と的確な描写を併せ持つ江戸時代前期のやまと絵系源氏絵である。

本作は、物語54段各段から異なる2場面を選び、紙本に著色と淡彩2種類の絵と、金泥と金砂子を多用した装飾料紙に親王や公家30名による寄合書きの詞を上下2帖に納める。絵と詞を一对にして物語全段を108場面ですべて1セットにする点が大きな特徴で、しかも淡彩画は本作だけに見られる構図や表現を取る場面が多く、本作の独自性を示す要因となっている。

本作は『紀州徳川家蔵品展覧目録』(1927年)に、86「源氏物語手鑑」「画筆者住吉如慶 詞書堂上寄合書」として挙がる。詞の書写人名を記した極め書きには親王や公家とともに「住吉如慶」の名が記され、「如慶」を「如慶」とするが住吉如慶(1599~1670)の筆になる紀州徳川家の伝来品とされてきた。本作は長らく所在不明であったが、砺波市美術館(富山県)が地元の国文学関係者から情報を得、本年9月同館の展覧会で初公開された。

先行研究は複製本の解説(1990年刊)ほかがある。その解説では、場面説明ほかの基礎的なデータと絵の特徴が総括的に説かれた。しかし著色画はカラー図版で示されたが、淡彩画は解説書内にモノクロ挿図として扱われるだけであり、淡彩画の重要性を考えるための情報が得られず、非公開のため先行研究の検証もできなかった。調査により、淡彩画は「白描源氏物語画帖」(フリーア美術館蔵)ほかの土佐光則筆白描源氏絵に準拠した構図の影響が顕著で、淡墨は髪、冠、蓓など特定の部分に限定する以外に暈に隈を付けるなど白描画法の応用が認められ、濃彩による著色画と色調上での明快な対比をもたらす鑑賞効果や絵と詞との対応も明確なことなどの新たな知見を得た。

本発表では、著色と淡彩による作品の全体像を改めて明らかにし、この組み合わせが源氏絵の需要拡大に対する絵師の創意として他に類を見ないことを指摘する。これを踏まえて淡彩画に着目する。近世土佐派が押し進め土佐光則によって頂点がきわめられた白描画法が本作の淡彩画に継承され、場面と構図にバリエーションをもたらす主たる要因となったこと、江戸時代後期の住吉派絵師の淡彩画制作につながる源氏絵制作の発展を促したことを光則筆白描源氏絵の構図や描写との比較を通して本作の淡彩画を意義づける。絵師は未詳ながら、極め書きから筆者と目される住吉如慶について、本作と同じく寄合書きの詞を持つ如慶筆「源氏物語画帖」(大英図書館蔵)ほかとの作風比較から妥当性を検討する。